

れることができるのではない。また、他者へ向かう感性的衝動と自己へ向かう形成衝動を結合させた遊戯衝動は、自己と他者の間で働くものであろう。更にそこには類的存在も射程に入ってくる。初期ロマン派のポエジーのごとく、遊戯衝動は共同体の紐帯になりうるとシラーは考えていたのではない。

キルケゴールにおける正義の問題

——「真理の証人」概念から——

須藤孝也

ロールズは、正義論の第一の主題を「社会の基本構造」とした上で、これを「主要な社会制度が根本的な権利と義務を割り当て、社会的協力から生じる利益の分け前を決定する仕方」と規定している。リベリズムや格差の理解に関しては一定の斬新さを含むものの、自然権や社会契約を目印にしながら「財」の社会的分配のいかんを論じる近世以来の正義論の伝統は、「利益の分け前」に注目するロールズの正義論に忠実に引き継がれている。これに対しキルケゴールは、自分が手にする財についてその権利を主張することそれ自体の自明性を剥奪する。「なぜなら、たとえば、一人の泥棒が私のお金を盗むという場合、彼がそうするという限りでは、彼と私とは同じではない。しかし、別の意味では我々は全く同じなのである。つまりお金はとても善いものだとする点で、実に泥棒と私とは同じ考えなのである」。キルケゴールは、財を「善きもの」と見ることを

根本から疑い、財に立脚して社会を統一する「共通善」を構想するのではなく、むしろ、そこに人間同士の争いを見る。そしてキルケゴールは、財に固執しない仕方、人びとが社会を構成することはできないか、と考える。キルケゴールが忠実に継承するのは、「神の国」を志向することによって「地の国」の財に固執することからの脱却を果たそうとするキリスト教の伝統である。「この世の財はどうでもいいものであり、それだから聖書は、人がそれを持っているときには、それをどうでもいいものとして持つべきであると教えるのである」。社会の調和は、誰かが財を諦めることによって、はじめて達成されるとキルケゴールは考えた。

「国家に任命された裁判官や正義の役人には、過ちや犯罪を見つけることに忙しくさせておこう。残りの我々は、裁判官や正義の役人を命じられていない。正反対に、我々は神によって愛を命じられている、すなわち酌量する穏やかな解釈によって多くの罪を掩うように命じられている」。こうした愛は、言うまでもなく、神と関わることによって、すなわち神に愛されることによって、人間が学ぶものである。ここには正義と愛が二重に共存している様が見られる。「赦す」ことは「許す」とことと同じではない、と換言することができよう。

キルケゴールは、神を考慮せずに人間だけの力で平等を達成しようとする企てについて、「同じ一つのが、格差を廃絶しようとしながら、そうすることによって別の格差を導入しようとする」と述べ、それは不可能であると言う。他方、キルケゴールは、現実社会にある不平等を見据えながら、神の前にと

もに遜る存在としての人間の平等を考えていた。キルケゴールは、神の仲立ちなしに単に一人の人間と他の人間を同列に並べる「大衆の平等」を語らない。こうした「この世的な平等」は、「単独者」たちの平等、すなわちキリスト教的な「神の前の平等」とは異質なものである。

しかし、右に述べたように、正義と愛という二つの基準は同時に存在し、弁証法的に関係し合うのであるから、両者は決して無関係のままではない。C・S・エヴァンスも指摘するように、いわば水が低きに流れるように、神の前の平等は、政治的な平等へと波及的な効果を及ぼすものとして考えられている。キルケゴールは、新約聖書に愛の実践の命令を読みとったがゆえに、政治的状况を改善しようとしないうちに信仰の在り方を厳しく批判した。すでに述べたように、「真理の証人」を目印にしてキリストを倣う者は、卑賤へと落ち込むことを覚悟して自らを与える者として考えられていた。もし我々がキルケゴール以上のような迂回路をとることを許すならば、そこにある種の正義論を見出すことは十分可能であると言えよう。

ニーチェ後期思想における 宗教と「教育」という問題

松田 愛

ニーチェが宗教、とりわけキリスト教に対して批判的であったことはよく知られている。ニーチェによれば、宗教は生の

「苦悩」との戦いであり（『道徳の系譜学』第三論文十七節）、価値を「逆立ち」させることによって「弱者」の生存を維持する（『善悪の彼岸』六十二節）。近代ヨーロッパではキリスト教によって人間が「弱体化」している、とニーチェは批判する。

ニーチェは、宗教的人間の「弱さ」から生じる「ルサンチマン」のうちに、「善」「悪」という価値判断の「起源」を求める。本発表は、まず、「起源」という言葉によってニーチェが何を意味していたのかを考えてみたい。ニーチェ自身、道徳的感情や評価の発生史とその批判とは区別されるべきものである、と明言している（『悦ばしき知識』三百四十五節）。『道徳の系譜学』では、ニーチェの言い方を吟味すれば、現在の道徳の「価値」についての否定的見通しの下で、「起源」が追求されていることがわかる（『道徳の系譜学』序言五、六節）。ということは、「起源」は、歴史的過去における一回限りの問題ではなく、「善」「悪」という価値判断を行う人間を現在においても規定している根源的な生存のことである。

ニーチェによれば、自己の「悪しき」欲求に打ち克とうとする禁欲によって「ルサンチマン」は方向転換する。「疾しい良心」が自己の「悪」を意識し、「負い目」を強く感じることによって、「弱者」は苦悩を感じなくなる。ただし、それは苦悩の倍加であり、「弱者」のさらなる「弱体化」でもある（『道徳の系譜学』第三論文二十、二十一節）。このように、一方で、ニーチェは、宗教が「強者」を否定し「弱者」を維持する点を批判するが、他方で、宗教的禁欲・「克己」を哲学者の「教育」の手段である、とも言う（『善悪の彼岸』六十一、六十二節）。